

### 一冊の本

ここに一冊の角川文庫がある。昭和三十年刊行、民俗学のさきがけ早川孝太郎の「猪・鹿・狸」という薄い文庫本である。この中に民俗学の粋、文学の楽しさが充満している。

タイトルページに「謹呈竹下角次郎様 早川孝太郎識」とある。力強い達筆である。竹下氏はかつて北設楽郡段嶺村の村長であり、民俗学の造詣が深かった。昭和の初期から戦争が激しくなる頃まで、北設楽地方の民俗学熱は最高であった。柳田国男、折口信夫らも訪問し指導した。

その結果は「設楽」という部厚い本となって、今も北設楽地方の民俗学の宝庫として残っている。実に楽しい著作である。

柳田先生が民俗学の父であれば、早川は母である。「猪・鹿・狸」を新城市内の人びとに是非読んでいただきたい。

### 早川孝太郎という人

早川孝太郎は明治二十二年に生まれ昭和三十一年にこの世を去った。六十七歳であった。愛知県南設楽郡横山生れ。明治三十九年上京、はじめ画家を志望し松岡映丘の門に入ったが、映丘からその兄柳田国男とのかかわりができ、以後民俗学の道を歩んだ。

とくに出身地奥三河の局地的精密調査にすぐれた成果をあげ、著書「花祭」が著名である。昭和五年、岡書院から出版された。

### 芥川の書評

「猪・鹿・狸」は大正十四年に出版された。翌年、芥川龍之介は原稿用紙四枚ほどの書評を書いた。

「（猪・鹿・狸）は民俗学の上にも定めし貢献する所の多い本である。しかもぼくの如き素人にも、その不気味さや美しさは少なからず魅力のある本である。ぼくは実際近頃はこのくらい愉快地読んだ本はなかった」と最上級の賛辞を送っている。

### 鹿の大群

山の朝はまだ暗かった。しかもその朝に限って、窪の底一面に霧が立ちこめている。其の男は他の連中とは一人離れた処から見ていた。じっと見ているうちに霧がもこもこ動くようで、上へ上へと拡がって来る。そしてだんだん近づくと従って、色が淡紅いように変わって来る。じっと見ているうち、あっと声を揚げんばかり驚いたそうである。

いままで霧とばかり思っていたのが、何千何百と、数限りなく続いた鹿の群であった。

(猪・鹿・狸より)

### 横山の家

平成十二年四月、地区の総代同志として、親しくなった、早川孝太郎の甥に当たる早川克己さんの話。

「叔父さんは背の高い人で、最後に会ったのは昭和二十一年頃であった。祖父要作は身上よく、子供たちも大切に育てられた。

孝太郎も私の父昭次も甘やかされて育った。叔父は民俗学に熱中し、田畑も抵当にいったような訳で横山には帰れなかった」

しかし、早川孝太郎は日本の民俗学の母であり、その文章は一級品である。

(2001年7月、新城市文化協会発行「新城文化」より)